信毎歌壇

小島　なお選

胸の奥には水槽をひとつ置き喋れぬ魚たちを遊ばせる　（松本市）飛　和

初夏の19号を南下する木曽は緑のビッグウェーブ　（南箕輪村）福沢　豪

「新しい戦前」て何　戦争の無い時代に生きぬるま湯の中　（塩尻市）三溝みい子

代名詞使いのプロとして母はラジコンみたいに僕を動かす　（熊本市）夏風かをる

グレーの毛つぶらな瞳何犬かと聞かば山羊なり八百屋で出会う　（松本市）興　絹枝

指二本差し出す先はテレビかなスマホの如く拡がれ画面　（大町市）降旗　恵子

ものさしで測った穴に種三つ老後の趣味は家庭菜園　（長野市）小林　操

待つ自分待たせた時もある自分冷えたコーヒー飲みてまた待つ　（長野市）松本　博人

本州の最北端の大間崎に大き鮪のモニュメント建つ　（小諸市）篠原　昭枝

大駅で目玉目玉に竦みぬと欠席連絡くる予備校の朝　（東京都小平市）真鍋　真悟

佳作

薔薇が咲き散歩の人が立ち止まる築四十年の家に陽が射す　（長野市）原田　博子

週一度豆腐屋の車やって来て離れし伯母の消息を知る　（松本市）小松　久志

選評　第一首、胸に泳ぐ魚たち。それは無数の感情の断片だろう。言葉未満の心こそもっとも自在なのだ。第二首、国道19号線を南下する車窓。うねりつつ大きく波打つ木曽の緑の迫力。第三首、不安定な政治状況や平和主義の揺らぐ現代を指す言葉。しかし戦争は比喩でなく紛れもない現実であったこと。第四首、あれやっといて。それ取って。信頼関係があってこそ代名詞は生き生きと機能する。

米川　千嘉子 選

障子貼りはじめし父の背の侘し爺ちゃんの死期さとりし小五　（長野市）丸山　祐司

なわとびはもうとべないが孫がとぶ風を切る音・土を打つ音　（千曲市）関　津和子

めっきりと参拝の人減る氏神様雪動で草刈りて吹き掃く　（飯田市）池田　健一

逝きし娘も離り住む息子もこの駅より通学なしし遠き日を恋ふ　（小諸市）篠原　昭枝

一晩の急ごしらへのマイホームにじつとしてゐるコゲモの安息　（千曲市）中村　美樹

歩行者用ボタン押さねば渡れない日本語でしか説明がない　（松本市）美甘　歓

まだ口を噤んでるだけ群生の燕子花にもそれぞれの言い分　（松本市）飛　和

「戦後っ子」と呼ばれしわれら喜寿も過ぎ不穏な時代の波に漂ふ　（飯山市）小野沢竹次

五月雨の寒き日蚕飼いの父母おもう煉炭焚いて温めていた　（長野市）せきたつお

わが店のガラス張りなるを許したまえ三回ぶつかりすずめ出られず　（千曲市）大谷　善邦

佳作

悔い多く胸の痛みを誰に語らん遠き鐘の音私を責める　（中野市）小林かつ子

ボロボロのモップのような大なれど眉毛の下に隠す宝石　（千曲市）石黒　信幸

選評　第一首、自宅で葬儀をした時代。祖父の息があるうちから弔問客を迎える準備をする父の悲しさも見ていた作者。第二首、縄跳び独特の音がしっかりと聞こえてくる下句が魅力的だ。第三首、人手がなくなればいよいよ機械化が進む。機械で刈って吹き飛ばすスピードと轟音。「氏神様」も驚くばかり。第四首、それぞれに遠くなった子どもたちだが、母である作者には恋しさばかり募って切ない。

小池　光 選

病む妻を慰む言葉みつからず手をさすりつつ爪のいろ誉む　（長野市）丸山　祐司

逆転の一打を放つ少年の今日の昼飯父の手作り　（木曽町）新村　亮三

伯母の着た着物で作りし日傘さし今日は出かけむ同窓会に　（長野市）島田　怜子

初夏の薄暮の空に大谷がアーチを架けるロスアンゼルス　（松川村）岡　豊村

ぼんやりと日向ぼこする時の間にひとひらの雲大屋根こゆる　（長野市）池田よし江

田植唄聞こえるように苗ゆれて倉科の田は今さかりなり　（千曲市）関　津和子

羽打ちておそいかかれる雄鶏にたじろぎ卵採るのあきらむ　（小布施町）市村志津枝

獰猛なこれは何者集積所に高く盛り上がる休み明けのゴミ　（長野市）原田りえ子

ゆらゆらとボビーは揺れるときがいい人間だってそれぞれでいい　（長野市）せきたつお

この先はさておき先ずは応援す新農相の備蓄米放出　（上田市）小林さよ子

佳作

おおむかし習ったはずのフランス語加藤登紀子の唄聴いて泣く　（安曇野市）林　靖子

楽しげに感想戦をする二人命を削り合ったその後　（松本市）美甘　歓

選評　第一首、重い病を患う妻。かける言葉が見つからない。黙って手をさするのみ。ふと爪の色に目がゆく。生き生きしてきれいだ。思わずそれを褒める。一筋の希望と愛がそこにある。第二首、野球に熱中する少年。逆転打を放った。母の手作りでなく、父の手作りであることが味わい深い。第三首、形見の着物を日傘に作ったのである。それを差して同窓会に。年月の過ぎるのはまことに早い。